

## シェイクスピアと農業 (2)

——エリザベス朝「農書」の系譜——

### Shakespeare and Agriculture (2): A Genealogical Study of Elizabethan Husbandry Manuals

上村幸弘

UEMURA Yukihiro

#### 【要旨】

5世紀にローマ軍が撤退すると、ブリテン島はゲルマン系諸民族の侵略を受けるが、農業は常に支配者を支える封建制の経済的基盤として機能してきた。特に11世紀のノルマン征服以降、厳密な検地が行われ、課税対象が明確になるにつれ、効率的な農業経営が求められるようになる。農業生産の舞台となる荘園において、安定的に利潤を生み出すシステムの構築に、農書は大きな役割を果たす。本稿は前編を承け、その第2章として初期中世から初期近代までのイングランド農業の状況を検証する。

#### 【Abstract】

After the Roman army had left Britain by A.D. 409, various Germanic peoples, including the Saxons, the Angles and the Danes, invaded the isle. During the post-Roman age local magnates were building the economic foundation through the efficient manorial system of agriculture. Especially in the Norman dynasty, the Domesday Book made the object of taxation clear. In order to achieve a stable profit, husbandry manuals played a decisive role in lay and ecclesiastical estates of late medieval and early modern England. We will examine the agrarian landscape through written works of this period.

#### 【キーワード】

囲い込み (enclosure)、キリスト教 (Christianity)、コーパス・クリスティ祝祭劇 (Corpus Christi Plays) 荘園制度 (manorial system)、農業倫理 (agricultural ethics)、農書 (husbandry manual)、ウォルター・オヴ・ヘンリー (Walter of Henley)、グロステスト (Robert Grosseteste)、シェイクスピア (William Shakespeare)、タキトゥス (Tacitus)、タッサー (Thomas Tusser)、フィッツハーバート (Master Fitzherbert)、フロワサール (Jean Froissart)、ベーダ (Bede)、ヘレスバッハ (Conrad Heresbach)、モア (Thomas More)、ラングランド (William Langland)

第2章：中世から初期近代イングランドにおける農業倫理

第1節：ノルマン征服以前の農業

1. タキトゥス

海峡の洋上から見たブリタニアの丘には武装した現地民の大群がすでに陣取っていた。紀元前55年、ユリウス・カエサル (Julius Caesar, 101-44 B.C.) の船団は未明にガリアのイティウスを出港し、午前9時ごろ開戦の時を待っていた。ローマ帝国のブリテン島支配の歴史はここから始まる。しかし、ブリタニアが属州となるのは、クラウディウス帝 (Tiberius Claudius Caesar Augustus Germanicus, 10

B.C.-A.D. 54) による遠征が開始される紀元 43 年まで待たねばならない。

カエサルが、そしてクラウディウスが見たブリテン島にはどのような民族が住んでいたのか。ガリア北方を領土とするベルガエ人は紀元前 57 年にカエサルによって征服されており、それまでに多くがブリテン島の海岸地方に移り住み、畑を耕していたとカエサルの『ガリア戦記』(*Bellum Gallicum: The Gallic War*) 4 年目と 5 年目の記述は伝える。

さらに、タキトゥス (Publius Cornelius Tacitus, 55?-120?) は『アグリコラ』(*Agricola*) でカエサルのおよそ 130 年後のブリタニアの様子を描く。岳父ダナエウス・ユリウス・アグリコラがブリタニア総督の任に着いた時代 (紀元 77 年 - 83 年) の伝記であるから、当然、その大半はアグリコラの武勇伝であるが、タキトゥスはブリテン島の風土についても時おり言及する。

The soil, except for the olive and the vine and the other fruits usual in warmer lands, is tolerant of crops and prolific of cattle: they ripen slowly, but are quick to sprout—in each case for the same reason, the abundant moisture of the soil and sky. (49)

土地は、オリーブや葡萄や、その他、通常は温暖な地方に育つものを除けば、どんな穀物にも適しており、家畜も多産である。熟するのは遅いが出るのは早い。どちらの場合も原因は同じである。つまり地中にも空気中にも水分が多いということである。

アグリコラが総督に着任した頃、ローマではウァロやコルメラの農業論がすでに読まれていた。そういった農書の理論やローマの作物が駐留軍によって持ち込まれていたという (Fussell 1972, 59)。いわゆるローマン・ブリテンでは、考古学的調査により、すでに犁刃を備えた犁先が使われていたことがわかっている (Hingley 196)。また、地域によって集落の形態は異なるものの、概ね耕地と牧地からなる混合農業が営まれていた。しかし、ブリテン島に進駐するローマ軍の人口は 2 世紀頃を頂点に 40,000 人以上とされ、40 あるローマ属州のうちでも最大規模の配備であった。この軍隊を維持するための生活物資は、当時のブリテン島内では賄い切れず、大陸からの供給に頼った。それにより大いに貿易が栄え、スペインのオリーブ、パレスチナのワイン、ガリアからは食器として使われた大量のサモス土器が入ってきた (Fleming 4)。

## 2. ベーダ

409 年にローマ軍が撤退すると軍事的プレゼンスの空白地帯となったブリテン島には、以降、大陸からゲルマン系の諸民族が侵入し、サクソン人を中心とした勢力が初期中世の社会基盤を築くと同時にキリスト教が本格的に浸透し始める。

Britain excels for grain and trees, and is well adapted for feeding cattle and beasts of burden. It also produces vines in some places, and has plenty of land and water-fowls of several sorts; it is remarkable for rivers abounding in fish, and plentiful springs. (Chapter I)

ブリテン島は穀物や樹木が良く育ち、荷役用の牛やその他の動物の飼育にも適している。所によっては葡萄も栽培され、さまざまな種類の鳥がいる。注目すべきは魚が豊富な川があること、また泉があちこちに湧いている。

ベータ (Bede, 673?–735) の『英国民教会史』(*The Ecclesiastical History of the English People*) は 731 年に完成されたとされ、カエサル の 侵攻以来、8 世紀までの民族史、教会史を描く。ここに見られる農業景観については、しかし、6 世紀のギルダス (Gildas) の『ブリテンの没落』(*De Excidio Britanniae*) にすでに同様の記述があり、その後も、8 世紀後半ネンニウス (Nennius) の『ブリトン人の歴史』(*Historia Brittonum*) や 12 世紀ジェフリー・オヴ・モンマス (Geoffrey of Monmouth) の『ブリタニア列王史』(*The History of the Kings of Britain*) がほぼ同じ表現を引き継いでいる。いずれにしても、離合集散を繰り返す勢力が、徐々にまとまり始め、やがて七王国の時代へと移り変わる狭間の時期であった。農業は、したがって、農民自らの生活と支配者層エリートの生活を支えるために余剰生産する能力を必要とする。アングロ・サクソン期に作成された耕地、池、河川、沼地、牧草地、森林、放牧地、海岸などの土地利用に関するチャーター (特許状) は、エリート層の社会基盤が整備され始めていることを示している (Hines 69)。

一方、諸王と緊密に繋がりを持ち始めたキリスト教は、その領内に礼拝堂や宗教関連施設を建設し、王家の家政との結びつきを強めた。こうした王と司教の連携によって、双方の権力基盤が盤石のものとなっていく。8 世紀の終わりにヴァイキングの襲来を受け、9 世紀には広大な所領が分割されて景観が大きく変わっても、キリスト教会は各地に勢力を拡大しつづけた。ウィリアム征服王の治世の終わりまでには、イングランドの富の 4 分の 1 を教会が保有していたと言われている (Pryce 153)。土地保有の在り方が確立していく中で、そこで展開される農業労働の在り方にも変化が生じたとすれば、それは支配者を支える論理的な仕組みをいかに作るかであったろう。

ノルマン征服 (1066 年) 以降、ノルマン貴族に封地が分配され効率的な荘園制が敷かれ、これまでのアングロ・サクソン系領主たちは排除された。「ドゥームズデイ・ブック」(Doomsday Book) の作成によって土地管理の厳格化と課税対象の明確化を図ることで、ノルマン王朝は王権を維持するための財源を確保した。この時、教会や修道院はアングロ・サクソン抵抗勢力に協力しない限り、領地を保証されたという (Gies 28)。聖書に示された農業倫理観が教会を通じて説かれることにより、封建領主は労働力と利益の確保を維持する仕組みを構築していったことは言うまでもない。

## 第 2 節：13～15 世紀の農業

### 1. 13 世紀農書選集

ジョゼフ・ギースとフランシス・ギース (Joseph Gies & Frances Gies) の『中世農村の生活』(*Life in a Medieval Village*) は、イングランド中部の村エルトンでラムジー大修道院を中心に展開する中世後期の人々の暮らしを生き生きと描き出す。「領主が村の自治に異を唱えることはまずなかった。領主が望んでいることは、借地人からの地代と諸税の確実な徴収、直當地の効率的運用、羊毛と穀物の高値取引だけであった。13 世紀後半、荘園経営の指南書が支持されたことは、大地主の関心の在り処を示している。」(49) ギースはこのように指摘した後、イングランドで最初に書かれた農書とされるウォルター・オヴ・ヘンリー (Walter of Henley) の『家政論』(*Husbandry*) に言及する。当時はもちろん写本の形で読まれていた。現在では 1890 年に W・カニングガム (W. Cunningham) とエリザベス・ラモンド (Elizabeth Lamond) が編集した 13 世紀の農書選集に収められている。『家政論』は古フランス語のノルマン方言 (Norman-French) で書かれており、選集ではロバート・グロステスト司教 (Robert Grosseteste, 1175–1253) の訳と伝えられる中世英語での訳文、およびラモンドによる現代英語訳で読める。

The father having fallen into old age said to his son, Dear son, live prudently towards God and the world. With regard to God, think often of the passion and death that Jesus Christ suffered for us, and love Him above all things and fear Him and lay hold of and keep His commandment; with regard to the world, think of the wheel of fortune, how man mounts little by little to wealth, and when he is at the top of the wheel, then by mishap he falls little by little into poverty, and then into wretchedness. Wherefore, I pray you, order your life according as your lands are valued yearly by the extent, and nothing beyond that. (Walter of Henley, *Husbandry*)

年老いた父親が息子にこう語りかける。愛しい息子よ、神様に対しても世間様に対しても、謹んだ生活を送るように。神様については、イエス・キリストが我らに代わって受難に耐えられたことを常に思うがよい。何ものにもまして神を愛し、神を畏れ、神がお命じになったことを守るように。世間様については、運命の車輪を思え。人間と言うものは徐々に富に登り行くものであるが、車輪が頂上に達するや、不運に見舞われ、徐々に貧困へと墮し、やがて惨めな生活を送る羽目になる。1年だけ収穫が良くても、次の年にはないものと心せよ。

『家政論』はこのように始まるが、全編を通じて教訓的と言うわけではない。差配人や召使の選び方、農作業を行う者への監視等の管理から、畝の立て方や播種の時期の作業工程の指示も具体的である。

13世紀農書選集には、前述のロバート・グロステスト司教が自らの教区の荘園で経営にあたる者に対して書かれた『聖ロバートの訓え』(*The Rules of St. Robert*) と呼ばれる農書が収められている。土地に合わせた播種の指示など全 28 節からなる極めて実用性が高い訓えの中でも、次の一節だけは、管理者側の正当性が神の名によって説かれる倫理的な側面を持つ。

Exhort all your household often that all those who serve you shall know to serve God and you, faithfully and painstakingly, and for the will of God to prefer in all things to do your will and pleasure in all things that are not against God. (*The Rules of St. Robert*, 'The Eighth Rule')

屋敷で生活する者全員に頻繁にこう言い聞かせるがよい。あなたに仕える者は皆、神とあなたに忠実かつ勤勉に仕えるものであることを忘れぬようにと。何事においても神のご意志はあなたの意思と願望を実行することを望んでおられるのであり、それは神のご意志に反するものではないということである。

この書は直接家人に対して労働の意義が示されているのではなく、司教(領主)と農業従事者の間にいる荘園の管理者のためのマニュアルであることがわかる。それは執事(steward)、荘園差配人(bailiff)、農奴監督官(reeve)と呼ばれる農業従事者の監督を業務とする中間管理職の役人たちである。聖書の教えと農業労働が強固に関連づけられている。

13世紀農書選集にはさらに『執事の務め』(*The Office of Seneschal*) と呼ばれる作者不詳の農書が収められている。この書では荘園の管理者の役割が部門ごとに明記され、「荘園差配人の仕事」「荘官の仕事」「牧草地管理人の仕事」……、最後は「乳搾り女の仕事」と、細分化された業務内容が詳述されているほか、敢えて「領主の仕事」という一項が設けられているのは興味深い。

The lord ought to love God and justice, and be faithful and true in his saying and doings, and he ought to hate sin and injustice, and evil-doing. (*The Office of Seneschal, "The Office of the Lord"*)

領主は神と正義を愛し、その言動に誠実でなければならない。さらに領主は罪と不公正と悪事を憎まねばならない。

最後に、この選集に収められている作者不詳の『家政論』(*Husbandry*) であるが、他の 3 書と異なる点をあげるとするならば、領主の利益を確保するための方策が冒頭から記されていることかもしれない。

In the first place he who renders account ought to swear that he will render a lawful account and faithfully account for what he has received of the goods of the lord, and that he will put nothing in his roll save what he has, to his knowledge, spent lawfully and to his lord's profit.

(Anonymous, *Husbandry*)

まず、明細書を出す者は次のことを誓約しなければならない。法で定められた明細書であること。領主の物品として受け取ったものを誠実に記載したものであること。自分の知っている限り、手持ちにあるもの以外は何も記さず、合法的かつ領主の利益に叶うよう支出すること。

ケンブリッジ大学のセント・ジョンズ・カレッジに残る写本は、その筆跡から 14 世紀初頭のものと考えられ、縦 7 フィート 4 インチ、幅 6 インチの巻物状で、これは通常、荘園差配人が明細書を記録する書式に似ているという (Cunningham xl)。

こうして 13 世紀に農書が登場する背景をプレストウィッチ (Michael Prestwich) は、領主による荘園の直接経営が推し進められた結果と考える。裏を返せば、それまでの荘園経営は借地による賃貸経営であったということであるが、12 世紀末より借地の新規契約停止や契約解除が行われ、大土地所有者による土地の回収が広まった (428)。むろん背景には急激な人口の増加があり、農地賃料よりも直接経営の方が利益を生み出せるとの思惑がある。細かな計算書や無駄のない支出の合理性を記した農書が求められる所以である。

荘園経営が確立していくプロセスにおいて、宗教的倫理性と経済的合理性のバランスが巧妙に図られる様子が 13 世紀農書選集の各所にうかがえる。しかし、後期中世から初期近代にかけて、このバランスは自然災害や戦争の影響により徐々に崩れ始める。

## 2. 「農書」空白期

14～15 世紀はイングランドのみならず、西ヨーロッパ全体で各国独自の農書が停滞する。前章の終わりに触れたように、一部、古代の農書が翻訳された時期ではあるが、それらが実用的なマニュアルとして利用されたかどうかはわからない。さらに各地の修道院に古代の農書が保管されていたことは知られているものの、熱心に書写されることはなかったようである。これには様々な理由が考えられる。最も根本的な原因は農書が必要とされていなかったことであろう。14 世紀の西ヨーロッパは、1315～17 年にかけての大飢饉、1349～51 年にかけての黒死病の流行により、人口の 30～50 パーセントが失われたと言われている。特にイングランドでは人口増加の兆しは 16 世紀の前半まで見られない。「このよう

な状況下にあっては、多くの人間は生命の維持に関心が向かうのであって、農業技術の改善を行うことには目が向かない」(Fussell 1972, 88) というのが正しい理解であるかもしれない。

14世紀後半に書かれたウィリアム・ラングランド(William Langland)の『農夫ピアズの幻想』(*The Vision of Piers Plowman*)にも世紀半ばに猛威を振るった黒死病の流行について言及されている。

Parsons and parish priests complained to the bishop  
That their parishes were poor since the pestilence-time,  
Asked for license and leave to live in London,  
And sing Masses there for simony, for silver is sweet. (*Piers Plowman*, Prologue 83-86)

教区主任司祭や教区司祭たちは直属の司教に不平を訴え、  
自分たちの教区が黒死病大流行以来貧乏になったので、  
ロンドンに居住する許可求めた、  
銀貨はよいものだから、そこで死者のためのミサを唱えたいのだと。

この一節だけを読めば、地方教区が財政的に成り立たなくなっている窮状が語られているようだが、実は私腹を肥やそうとする聖職者たちを揶揄しているのである。ただし、黒死病によって農業労働者の数が激減したことも事実で、荘園領主が雇う労働者の人件費が高騰した。

He grows angry at God and grumbles against Reason,  
And then curses the king and all the council after  
Because they legislate laws that punish laboring men. (Passum VI 316-18)

彼(賃金労働者)は神に向かっても腹を立て、理性に対しても不平をこぼし、  
やがては国王や枢密院に対してまでも罵るのである  
労働者に罰を与える法律を制定したからだ。

労働者が高い報酬を求めて荘園を移動することを制限するため、賃金の上限が定められた。これにより領主は賃金上昇を抑えて労働力を確保しようとしたが、農夫の不満を抑え込めたとはいえない。

1337~1453年まで断続的に続いた英仏百年戦争の影響も測り知れない。

And all our vineyard, fallows, meads, and hedges,  
Defective in their natures, grow to wildness.  
Even so our houses, and ourselves, and children,  
Have lost, or do not learn for want of time,  
The sciences that should become our country,  
But grow like savages—as soldiers will  
That nothing do but meditate on blood—  
To swearing and stern looks, defus'd attire,  
And every thing that seems unnatural. (*Henry V*, V. ii. 54-62)

フランス全土の葡萄畑、休閒地、牧場、生垣は、  
本来の機能が失われて、野生に戻ってしまいました。  
同様に家屋敷も、我々自身も、それに子どもたちまでもが、  
時間がないからと言っては祖国に相応しい学問を  
止めてしまうか、さもなければ学ぼうとしないのです。  
まるで兵士のように残酷な人間になってしまい  
血を追い求めることばかりに熱心で、  
ことば使いは乱暴、鬼の形相、服装は乱れ放題、  
持って生まれたものをすべて失ってしまったかのようです。

1420年、トロワ条約締結。シェイクスピアが『ヘンリー5世』(1599)の終盤でブルゴーニュ公爵を通して描く主戦場となったフランスの景観は、自然(nature)と人間性(human nature)の連動を示唆して興味深い。耕作を放棄した土地が野生に戻るが如く、教育を放棄した人間は野性に目覚める。百年戦争は、しかし、次のヘンリー6世の治世によりやがて終戦を迎える。これに関してはいずれ第3章で詳しく述べるが、シェイクスピア歴史劇第2・4部作の舞台はリチャード2世(1377-1400)からヘンリー5世(1413-1422)、第1・4部作がヘンリー6世(1422-1461, 1470-1471)からリチャード3世(1483-1485)の治世を描き、ちょうど14世紀から15世紀の農書の空白期と重なり合っている。恐らく、これは偶然の一致ではない。第2・4部作は英仏百年戦争が背景にあり、第1・4部作はヨーク家とランカスター家の薔薇戦争を舞台とする。この間、農業従事者は軍事要員として多くが徴兵されていたはずである。帰還した負傷兵の中には、元の職場にも戻ることができなかった者もいただろう。生活の質の改善を問う農書に向かわないのも当然である。

「彼らが贅沢な暮らしができるのは、すべて我らが生み出したもの、我らの労働から生み出されたもののお陰である。我らは農奴と呼ばれ、仕事が遅いと言っては鞭打たれる。不平を言うにも領主様はおらず、我らの話を聞き、正義の裁きをしてくれる者はいない。そうだ、王様のところへ行こうではないか。彼は若い。王様に我らが抑圧されている窮状を聴いてもらおう。物事が変わるか、物事を換えられるかどうかを我らが望んでいることを王様には伝えよう。我らが誠実に、ともに行動を起こせば、農奴と呼ばれ隷属状態にある多くの人々は、自由を求めて我らを支持してくれよう。国王も我らと面会し、話を聞いてくれれば、悪を正してくださるだろう。喜んでなさるかどうかは別問題ではあるが。」このような類のことをジョン・ボールは日曜日に村々を訪れては説教して回った。ボールを強く支持する者も現われ、ボールの考えに賛同する民衆も多かった。(Froissart 212)

1381年、ワット・タイラーの一揆(Peasants' Revolt)勃発。ここで言う若き国王とは、即位して5年目のリチャード2世(当時14歳)。長引く百年戦争と人頭税で14世紀後半農民の不満は頂点に達する。荘園制度をベースにした封建制がほころび、農奴解放の機運が高まり、社会構造が大きく転換し始める。

14～15世紀は古典の農書が翻訳された時代であると述べた。それでもイングランドの人々がウェルギリウスの『牧歌』や『農耕詩』、カトの『農業論』に精通していたとはとても思えないが、この時代に全盛を極めたコーパス・クリスティ祝祭劇と呼ばれる宗教劇の中でも羊飼いの苦悩が描かれている。

All my shepe ar gone,  
I am not left oone,  
The rott has them slone;  
Now beg I and borrow. (24-27)

羊がみな死にしまった。  
一匹残らず  
疫病でやられちゃいました。  
物乞いして、借金で暮らしています。

この『羊飼いの劇 I』(*Prima Pastorum*) はイングランド各地に残るコーパス・クリスティ祝祭劇の中でも、タウンリー・サイクルと呼ばれる一連の宗教劇の 1 編で、15 世紀のヨークシャー地方の方言で書かれている。『羊飼いの劇 I』を書いた「ウェイクフィールドの劇作家」(Wakefield Master) とされる人物は、ラテン語のみならず当時の羊飼いの生活に相当精通していたと思われる。

3 人の羊飼いたちは天候の不順や疫病に苦しみ、生活の厳しさを神に訴え、救いを求める。ビールを飲み眠りについたところに天使が現れ、キリストの誕生を告げると、羊飼いたちの態度は一変し、ベツレヘムへ向かう。馬小屋に入り贈り物を贈るとマリアから次のミッションが与えられる。

Tell furth of this case,  
He spede youre pase,  
And graunt you good endyng. (491-93)

主の誕生されたことを広く世に宣べ伝えてください。  
主は、最後まで、  
あなたがたを護られましょう。

『羊飼いの劇』は他にもヨーク・サイクルに収められているが、キリスト生誕を伝える物語構造の意義は同じで、神の意思が最も身分の低い人間(羊飼い)に伝えられる。「ルカによる福音書」第 2 章 8-20 に基づくこのエピソードでは、羊飼いが聖職者を指し、キリスト教の伝道者を容易に連想させることは言うまでもない (Bevington 378)。

後期中世、こうしてキリスト教は農業のイメージを最大限に活用し、笑いと憂いを効果的に織り交ぜて貧しい人々への布教に成功する。当時何らかの形で農業に関わる人々が人口の 90 パーセントを占めていたとされるイングランドにあって、演劇というメディアは教会の強力な宣伝媒体となった。

### 第 3 節：16 世紀の農業

#### 1. トマス・モア

リチャード 3 世がボズワースの野に斃れ、リッチモンド伯ヘンリー・テューダー (Earl of Richmond, Henry Tudor) がヘンリー 7 世 (1485-1509) として即位すると、国王は急ピッチで財政再建に取り掛かる。とりわけ、フランスで挙兵するにあたってフランス王室およびブリュターニュ公から借りた莫大な借金の返済を急いだ。王室の収入源となる王領地からあがる貢租の徴収を厳格化し、ハンザ同盟や地

中海商人の影響力を排して貿易を活性化し、羊毛輸出やワイン輸入の関税徴収を徹底した。16世紀のイングランド農業は、こうした大きな経済活動の変革の波に呑み込まれていく。

耕地よりも牧羊地からあがる利益の方が大きかった。羊毛産業から受ける貢租・関税は、王室財政にとっては不可欠であった。相続によって細分化された土地を受け継いだ小規模土地保有農たちは効率的な農場経営ができなくなり、土地を手放す者が増えた。1520年代以降、このタイミングで14世紀から続く人口減少が上向きに転ずる。土地を買収して農場経営にさまざまな人々が参入し、ジェントリーと呼ばれる新たな階級を生み出していく。人口増加を背景に農産物が急激に値上がりする。1500年から1650年の150年間で穀物は7倍に、その他の農産物も650パーセント上昇した (Heal 101)。

トマス・モア (Thomas More, 1478-1535) の『ユートピア』 (*Utopia*) は1516年にラテン語で出版された。

Agriculture is the one pursuit which is common to all, both men and women, without exception. They are all instructed in it from childhood, partly by principles taught in school, partly by field trips to the farms closer to the city as if for recreation. Here they do not merely look on, but, as opportunity arises for bodily exercise, they do the actual work. (*Utopia*, 125)

農業は男女とも全員が共通して行う仕事であり、例外は認められない。全員が子どもの頃から訓練されており、学校では理論が教え込まれ、遠足として近隣の農家に研修に行く場合もある。ここでは眺めているだけでなく、実際に体を動かしてして実施する機会も設けられており、実践的な作業が行われる。

モアの描くコモンウェルスではすべての子供が農業の理論的および実践的訓練を受ける。集団的国営農場のような形態がどのような末路を辿ることになるのか知る由もない当時の知識人が、このような共産主義的農場経営を志向するのは、現実のイングランドの農業社会に対する強い公憤に突き動かされたからであろう。当時の産業構造の変革があまりにも急激であったため、土地を手放して職を失った人々への対策が追い付いていないこと、そしてそれが犯罪を誘発していることへの無策を『ユートピア』はまるで告発するかのよう映し出す。

In all those parts of the realm where the finest and therefore costliest wool is produced, there are noblemen, gentlemen, and even some abbots though otherwise holy men, who are not satisfied with the annual revenues and profits which their predecessors used to derive from their estates. They are not content, by leading an idle and sumptuous life, to do no good to their country; they must also do it positive harm. They leave no ground to be tilled; they enclose every bit of land for pasture; (67)

最高品質ゆえに高値で売れる羊毛が製造される場所ならどこでも言えることなのですが、貴族であれ、紳士階級であれ、司教たちまでも (こんなことさえしなければ聖者で通るのですが)、これまで通りの荘園経営から得られていた年収と利益に満足できないというのです。怠け癖が付き、贅沢な暮らしにすっかり慣れてしまったためか、国家の役に立たないことなどは敢えて行わないものの、それがかえって全くの害悪となる始末。つまり耕すべき土地を少しも残さず、すべて牧場とし

て囲っているのです。

『トマス・モアとその時代』(澤田昭夫他編)は豊富な資料を提示しながら16世紀前半の囲い込みの実例をあげる。興味深いのは、それぞれの土地の有力者が力づくで囲い込んで農民を追い出すだけでなく、領主間の闘争も熾烈を極めたという点である(若原 322 - 23)。さらに1520年以降の人口の急増は、特に牛や羊の食肉を生産する牧畜経営を促進したという。イングランドの食生活史はこのあたりに境界線を引けるのかもしれない。

囲い込み運動の結果生じる社会問題は、テューダー朝の財政再建という観点から見た場合、効率的な財源確保による副作用である。「農民を圧迫し、廃村をもたらし、王国をむしばみながら進行する非情なエンクロージャーの実情をモアは黙視するにたえず、その土地支配者たちの食欲さは、カトリック・ヒューマニズムの立場からきびしく糾弾されねばならなかったのであろう」(若原 318)。

## 2. フィッツハーバート

フィッツハーバート(Master Fitzherbert)の『農書』(*The Book of Husbandry*)は、イングランド最初の印刷された農書とされている。

*Sit ista questio. This is the question, whereunto is euerye manne ordeyned? And as Job saythe, Homo nascitur ad laborem, sicut auis ad volandum:* That is to saye, a man is ordeyed and borne to do labour, as a bird is ordeyned to flye. And the Apostle saythe, *Qui non laborat, non manducet: Debt enim in obsequio dei laborare, qui de bonis eius vull manducare:* That is to saye, he that laboureth not, shulde not eate, and he ought to labour and doo goddess warke, that wyll eate of his goodes or gyftes. (‘The authours prologue’)

*Sit ista questio.* このように問う。すべて人間は何をすべく定められているか、と。ヨブが言う如く、*Homo nascitur ad laborem, sicut auis ad volandum:* すなわち、人はみな生まれながら働くように定められている。鳥が飛ぶことを定められている如く。さらにヨブ曰く、*Qui non laborat, non manducet: Debt enim in obsequio dei laborare, qui de bonis eius vull manducare:* すなわち、働かざる者は食うべからず。働きかつ善行を積むこと。善行の結果が食べることに繋がる。すなわち、神の恵みである、と。

モアの『ユートピア』とほぼ同時代に書かれたフィッツハーバートの『農書』は、13世紀のウォルター・オヴ・ヘンリーの『家政論』がそうであったように、人口増加に伴う食糧需要が高まる時代に現れる。13世紀の一連の農書が領主の館を中心とする開放農地を前提に書かれていたのに対し、14~15世紀の災害・戦争を経験し、産業構造が変化した16世紀イングランドの農業には新たな視点の農書が必要であった。ホスキンス(W. G. Hoskins)は「16世紀初頭のイングランド景観の最も特筆すべき点は、人間と羊の割合がほぼ1対3であったことだ。イングランド全体の人口が250万~300万人であるのに対し、羊の数は恐らく800万頭に達していた」と指摘する(Hoskins 129)。フィッツハーバートはこの現実を無視して理想論を展開しない。むしろ、囲い込み政策を積極的に評価し、牧畜業に適した土地管理の方策を提案する。その第37節で「農家は牧畜業を営まずに穀類だけでは儲からないし、逆に、穀類を作らずに牧畜業だけでも儲からない」‘AN housbande can not well thryue by his corne, without he

haue other cattle, nor by his cattell, without corne.’ (Fitzherbert 42) と混合農業を基本としたうえで、38 節以降は畜産技術および生垣 (quickset)・水路 (ditch) の敷設方法が詳細に説明される。

一方で、フィッツハーバートは耕作技術についても造詣が深い。農夫 (husband) にとって最も重要な農機具を犁 (鋤) としたうえで、その種類と用途を理解して持つておくように説く。

There be plowes of dyuers makynge in dyuers countreys, and in lyke wyse there be plowes of yren of dyures facyons. And that is bycause there be many maner of groundes and soyles. Some white cley, some redde cley, some grauell or chylturne, some sande, some meane erthe, some medled with marle, and in many places heeth-grounde, and one ploughe wyll not serue in all places. Wherfore it is necessarye, to haue dyuers maners of plowes. In Sommersetshyre, about Zelcester, the sharbeame, that in many places is called the ploughehedde, is foure or fyue foe lone, and it is brode and thynne. And that is bycause the lande is verye toughe, and wolde soke the ploughe into the erthe, yf the sharbeame were not long, brode, and thynne. (Fitzherbert 9)

地方によって犁の製造法もさまざまである。同様に犁に用いられる鉄製の犁先も多種多様である。これは土壌の質が異なるためである。白土、赤土、砂利、白亜土、砂、やせた土地、泥炭混じりの土地、ヒースの茂る土地も多く、一種類の犁でこれらすべての土地を耕すことはできない。したがって、数種類の犁が必要ということになる。サマセット州のゼルスター周辺では、犁長柄（多くの地方では犁先と呼ばれている）が 4~5 フィートもあり、しかも幅広で薄くできている。これは土地に粘り気があるためで、柄の部分が長く、広く、薄くなければ、犁自体が土壌に沈み込んでしまうのである。

13 世紀の農書は主に土地の管理や経理に主眼が置かれていたが、フィッツハーバートの時代にはすでに土地に合わせた合理的な農業技術が指南されている。土壌の分析とそれに応じた犁刃の選定と言った綿密な段取りはウォルター・オヴ・ヘンリーの『家政論』には見られない。また、マクレイ (Andrew McRae) が指摘するように、フィッツハーバートが読者として想定しているのは、第 141 節 (1534 年版) の「利益を上げたいと思う若きジェントルマン」 ‘yonge gentyl-man, that entendeth to thryue’ であり、チューダー朝為政者の押し進める経済政策に則して土地に資金を投下してきた新たな農業者と言える (McRae 1992, 37)。それは取りも直さずモアが批判の対象として挙げた「百姓たちの耕作地をとりあげてしまい、牧場としてすっかり囲ってしまう」新手の地主であることは言うまでもない。

### 3. コンラッド・ヘレスバッハ

バーナビ・グージ (Barnabe Googe, 1540-1594) 訳のヘレスバッハ (Conrad Heresbach, 1496-1576) 『農業に関する 4 章』 (*Foure Bookes of Husbandrie*) について簡単に触れておく。1570 年、ラテン語で出版されたヘレスバッハの *Rei rusticate libri quatuor* はドイツ最初の農書と言われている。77 年、グージによってその英訳版が出版された。グージ訳はその後も独自の増補が行われながら 17 世紀になっても版を重ねるほどの読者を得ている。しかし、フィッツハーバートの『農書』が農業技術論に留まらない農業経済論と呼びうる一方で、ヘレスバッハの農書は当時のドイツでは最先進地であるラインランド地方を主たる記述の対象としているものの、所領管理論的色彩が強い技術論と評する向きもある (三好 32)。さらに『農業に関する 4 章』の論述形態は、理論書の体を取らず、4 人の人物による言わ

ば演劇的な会話形式で展開される。

CONO. Me thinketh I hear a neighing & trampling of horses without, go Hermes go know what strangers there are.

HERMES. Sir, If my sight faile mee not, it is Rigo, the principall secretary.

METELLA. A goodly matter, scarce you have been two daies at home, and now you must be sent for againe to the Court, perhaps to be sent abroad in some embassage.

CONO. God forbid, judge the best, it may be he comes to see me of curtesie and friendship.

RIGO. Ah maister Cono, I am glad I have found you in the midst of your country joyes and pleasures: Surely you are a happie man, that shifting your self from the troubles and turmoiles of the Court, can picke out so quiet a life, and giuing ouer al, can secretly ly hid in the pleasant Countrie, suffering us in the meane time to be cost and torne with the cares and businesse of the common weale. (1)

コノ おもてで馬の鳴き声と蹄の音がしたようだが、どなたか来られたようだ。ヘルメス、ちょっと見てきてくれないか。

ヘルメス 私の見間違いでございませでしたら、第一秘書官のリゴ様かと存じます。

メテッラ それはようございました。これまでも2日と家に居られることがございましたから、きっと宮廷に戻るようにお達しがあるのでございましょう。それとも外交任務かしら。

コノ 勘弁してくれ。もっとまじな言い方はないのか。ごあいさつに来られただけよ。

リゴ ああ、コノ殿、お会いできて良かった。お故郷に引かれて大そうお楽しみのように。お幸せそうで何よりです。宮廷の煩わしさからご隠退なさって静かに余生を送られておいでだ。すべて身を引かれてひっそりと快適な田舎暮らしを満喫されておられるが、一方、我々は国家の政で身も心もボロボロのありさまです。

コノは田舎に隠遁した紳士、メテッラはその妻、ヘルメスは召使い、リゴは宮廷人という設定である。この会話形式による農業論の展開はクセノフォンの『オイコノミコス』を想起させる。物語は主にコノがリゴに語る形がとられ、犁耕、施肥、播種、管理人の選び方など、古典農書の理論体系が網羅されている。しかも、農業に関する労働の意義を新約聖書のイエスの生きざまに見出し、その倫理的裏付けを古代ローマの哲学に求める。この論法はフィッツハーバートにはない。

Our Sauieur Christ himselfe glorieth to be the son of a husbandman, and frameth his parables of planting of wines, of sheepe and sheeheardes; moreouer, as it is in Luke, our Lord seemeth to be a teacher of husbandry, where he sheweth, that trees are to be digged about and dunged, that they may prosper the better. For sith this knowledge is of all other most innocent, and without which it is most plaine we are not able to liue: the best men have alwayes imbraced it, and the old fathers have euer counted it very Cosen-German to wisdom. Cicero calleth it the Mistris of Justice, diligence, and thriftines: some others call it the mother and nurse of all other arts. (6)

我らの救い主キリスト自身が農夫の息子であることを誇りとされ、葡萄栽培、羊や羊飼いのたとえ話をされる。さらに「ルカによる福音書」にもあるように、我らの主は農業の導き手でもあるようだ。主は次のように説かれている。栄えるためには、森を開いて施肥をせよと。農業の知恵はあらゆるものの中で最も罪のないものであり、それがなければ生きてはいけないものでもある。賢者は常にそのことを胸に抱き、老人はそれを金科玉条の如く心得ている。キケロは農業を正義と勤勉と儉約の守護神と呼び、またそれを諸芸の母であり乳母であると言う者もいる。

ラテン語によるドイツの農書ながらヘレスバッハの『農業に関する 4 章』は、次項で述べるトマス・タッサーの『農業要訣五百箇条』(*Five Hundred Points of Good Husbandrie, 1573, Rev. 1580*)と同様、次世紀にわたって長く読み継がれる農書となる。サースクは次のように分析する。「ヘレスバッハはドイツの人文学者であり、ユーリヒ=クレーフェ=ベルク公に仕える役人でもあった。彼の政治、教育、宗教的寛容への貢献は、農業への貢献よりも重要であると一般的には考えられている。しかし、彼の農書はイングランドで何度も再版されており、この書物こそイングランドの人々によって最も記憶されている彼の代表作なのである。1670 年代においてさえ相当な敬意が払われており、トマス・タッサーに次ぐ碩学とも謳われ、もはやイギリス人の作品と見なされていた。ヘレスバッハの農書の 1 ページ目には、田舎暮らしを野蛮な生活と呼び、獣、のらくら者、雑木にかこまれた生活と揶揄する宮廷人の嘲笑をもとめず、田舎暮らしを擁護する澆刺とした会話が交わされている。」(Thirsk 25)。おそらく、サースクの説明に尽きる。ヘレスバッハの読者層は明らかに中央の政治を離れ、田舎の生活に新たな活路を求めて農地に資金を投下する新参の地主たちであった。1577 年の初版から扉ページに掲げられている聖書の句には、そんな彼らに覚悟を求めるメッセージが込められている。

In the sweat of thy face shalt thou eate thy bread, till thou be turned againe into the ground, for out of it wast thou taken: yea, dust thou art, and to dust shalt thou returne. (Genesis, 3.19)

お前は顔に汗を流してパンを得る、土に返るときまで。お前は土から取られたのだから、塵にすぎないお前は塵に返る。(「創世記」 3.19)

#### 4. トマス・タッサー

ヘレスバッハの英語訳が登場する 20 年前、『農業要訣百箇条』(*A Hundreth Good Points of Husbandrie, 1557*) という農書が出版されている。これは 1573 年に『農業要訣五百箇条』(*Five Hundreth Good Points of Husbandry*)として大幅に増補されることになる。トマス・タッサー(Thomas Tusser, 1524-1580)の農書は 16 世紀中にさらに 76 年、77 年、80 年、93 年と版を重ね、『百箇条』の初版から 1637 年版『五百箇条』まで実に 23 版を数えたと言う (Scott 16)。グージも読者への序文の中で、ウェアロ、コルメラ、パラディウス等とともにフィッツハーバートとタッサーの名を挙げて賞讃している。農書作家としての影響関係から言えば、タッサーを先に論じるべきところであるが、テューダー朝からステュアート朝にかけて継続に版を重ねていること、またその読者層が明らかに変化し始めていること考慮して後に回すこととした。

タッサーの出自については、甥ジョン・タッサー(長兄クレメントの息子)の記録によってある程度のことが知られている。エセックスのリヴェンホールで生まれ、イートン校からケンブリッジ大学に進

学する。1550年代半ばに結婚し、サフォークに移り住んで農業を始めた。1557年出版の『農業要訣百箇条』はここで書かれた。

タッサーの農書は評価が分かれる。実践的な農書としての完成度と文学的な創造性、その両面において各界の専門家たちの批判を受けてきた。農業歴史家サースクはタッサーに言及することはあっても、革新的技術面での評価は低く、C・S・ルイスはタッサーの文学性に疑問を呈し、「農耕詩ではない」とまで言い切る (McRae 1992, 44-45)。一方、1931年に『農業要訣』を編集した社会史家ドロシー・ハートリー (Dorothy Hartley) は、後年『失われた田園生活』 (*Lost Country Life*, 1979) の中で、タッサーの詩行を引用しながら中世以降のイングランド生活史を描く。「タッサーは農民を知り、土地を知り、土地に適した作物や動物のことを知っていた」と評価は高い (vii)。

いわゆるテューダー朝のベストセラー『農業要訣五百箇条』は、9月から始まり8月で終わる農業暦が韻文で綴られている。その韻律は(方言が混じっていることもあり)精度に欠け、「へぼ詩」(doggerel verse)と揶揄されるが (Fussell 1950, 8)、本論に入る前に短い前文 (Abstract) が付され、内容が素早く検索できるような仕組みが施されている。

『五百箇条』として大幅増補された際に農業暦の前に加えられた詩の中に「儉約への階段」という教訓詩がある。

To take thy calling thankfully, / and shun the path to beggary.  
 To grudge in youth no drudgery, / to come by knowledge perfectly.  
 To count no travel slaverie, / that brings in pennie saverlie.  
 To folow profit earnestlie, / but medle not with pilferie.  
 To get by honest practisie, / and keepe thy gettings covertlie. ('The Ladder to Thrift', 1-10)

今の仕事を天職と思って感謝し、物乞いへの道を閉ざすがよい。

若い時の労苦は厭わず、十分に知識を身につけること。

骨折り仕事を割に合わないと思わぬこと、塵も積もれば山となる。

熱心に利益を求めるのはよいが、人の金をくすねるような真似はするな。

正直に金を儲け、手に入れたものはこっそり仕舞っておくこと。

「この類の詩文を記憶の手助けにしたがる愚鈍な連中の役に立つ」 (Fussell 1950, 8) とタッサーの文才を酷評し、時代を超えて読み継がれた事実を「大衆迎合主義」と切り捨てるのはたやすい。確かにタッサーにはギリシア・ローマの古典農書への言及はなく、新しい農業技術を取り込んだわけでもない。一方、1878年版の編者は著者略伝で「タッサーの著作は彼が真のキリスト教精神の持ち主であったことを示しており、農事に関する優れた格言や洞察は、彼が生きた時代の遙か先を行くものであることを証明している。」 (Payne and Herrtage xvi) と評価する。

専門技術的および文学的な質がこれほど問われる農書はここまでの考察ではなかった。おそらくこれはタッサーが想定している(もしくはタッサーを求めている)読者が、これまでのようなエリート層ではないということだろう。「より商業化が進むことにより、地主、大借地農、農業労働者からなるイングランドに特徴的な農村社会構造が1600年までには明確に出現していた」 (Sharpe 24) とされるが、当然、借地農間にも格差が生まれた。借地農の主な階層はジェントリー (gentry) とヨーマンリー (yeomanry) で、このうち比較的小規模な農地を借り受けたヨーマンの割合が増加しつつあった。ジ

ェントリーとヨーマンリーを分ける客観的な基準はなく、特に小規模ジェントリー (lesser gentry) と大規模ヨーマン (richer yeoman) に厳密な区分は難しいとされる (Batho 301)。

Fight, gentlemen of England! fight, bold yeomen! (*Richard III*, V. iii. 338)

進め、イングランドのジェントルマン。進め、勇敢なヨーマンたち。

ボズワースの戦いの大詰めでリチャード3世が兵士を鼓舞する場面。ここで使われている 'yeomen' は、『シェイクスピア・レキシコン』の定義によれば、「慣例的に一般兵を呼ぶときの呼称」とある。シェイクスピアからもう一つ事例をあげておこう。

And you, good yeomen,  
Whose limbs were made in England, show us here  
The mettle of your pasture; (*Henry V*, III. i. 25-27)

それにヨーマンたち、  
お前たちの四肢はイングランドで育まれているはず。  
その牧場で鍛え上げた鋼の肢体をここで見せつけるがよい。

ヘンリー5世率いるイングランドの少数精鋭部隊がハーフラー攻城に挑む場面である。国王はやはり兵士を「ヨーマン」と呼んで激励する。この前段で国王はイングランドの貴族に勇気をふり絞るように呼びかけているので、「ヨーマン」は明らかに貴族と区別するための方便とも読める。そこには厳密にはヨーマンとも呼べない者たちもいただろう。「その牧場で鍛え上げられた鋼の肢体」が仮に比喩だとしても、一般兵にはヨーマンを含む多くの農民が徴用されていたという事実は等閑に付されるべきではない。いずれ第3章で詳しく述べるが、シェイクスピアは農業用語を戦争の比喩として用いることがたびたびある。しかし、その逆はあるだろうか。

Go muster thy seruants, be captaine thy selfe,  
prouiding them weapon and other like pelfe.  
Get bottles and walletts, keepe fielde in the heat,  
the feare is as much, as the danger is great.  
(*Five Hundred Points of Good Husbandry*, 55-1)

『農業要訣五百箇条』の7月の作業の第1スタンザはこのように始まる。文字通り、「家来を招集し、お前自身が指揮官となって、武器やその他の機材を手配せよ」ということだが、ここでは「家の者を集めて、お前が中心になって、農機具をあてがいなさい」と読むことになる。農書が戦争用語を比喩として利用しているのだ。'Get bottles and walletts, keepe fielde in the heat' は「飲み物や食べ物を持ったまま、休まずに畑で作業を行う」ことを言っているが、'fielde in the heat' はまさに「戦場」であるし、最終行の「危険を伴う分だけ恐怖心も募る」は、7月の作業で稈まぐさの刈取りに用いられる大鎌が2行目の 'weapon' のイメージと連動する。

マクレーは「この書は書物になじみの薄い小規模農家に資する目的で書かれたもので、ジェントリーの娯楽を目的としていない」(McRae 1996,147)と指摘し、市場経済に移行する過渡期にあつて、小自作農(smallholder)がいかに利益を追求すべきかを指南する農書として、マーカム(Gervase Markham)へと受け継がれていくと展望する(151)。前節のグージ訳のヘレスバッハと比べると、タッサーは教訓的ではあるが宗教的ではない。彼の生活スタイルはキリスト教的倫理観に基づいてはいるが、それを農業実践の動機とはしていない。エリート農業経営者には物足りないだろうが、『農業要訣五百箇条』は、言葉の力によって田野で犁の柄を握る農夫の心を動かした初めての農書であった。

以上、本章では初期中世から初期近代に至るイングランドの農業の状況を、種々の文献を通して考察してきた。それは宗教、環境、政治、経済に翻弄されながら16世紀の個人主義の時代を迎えるが、同時に、国内経済の拡大と国際競争の時代へと突入する分水嶺でもある。

農書の系譜をたどると、興味深いことに演劇の歴史とシンクロする部分が多いことに気づく。特に後期中世からルネサンスへと演劇が宗教性を失っていくプロセスは、同時期、農書がもはや聖書における労働の必然性を利用しなくなってくることに似る。そして、この期の最終段階で扱ったタッサーにおいて、実用書としての農書と文学が交差する局面を捉えることができた。実は、こういった現象は古典古代でもすでに始まっていた(「第1章」参照)。

次章では、シェイクスピアおよび同時代の文学作品において農業(husbandry)がいかに人々の価値観形成に関わっているかを検証する。

## 注

\*本稿のシェイクスピア作品の幕・場・行は、すべて *The Riverside Shakespeare*, 2<sup>nd</sup> Edition (Houghton Mifflin, 1997) による。

## 引用文献

- Batho, Gordon. "Landlords in England." *The Agrarian History of England and Wales, Vol. 4*. Ed. Joan Thirsk. Cambridge: CUP, 1967.
- Bede. *Bede's Ecclesiastical History*. Ed. Dom David Knowles. Everyman Library. London: Dent, 1965.
- Bevington, David. *Medieval Drama*. Boston: Houghton Mifflin, 1975.
- Cawley, A. C. Ed. *The Wakefield Pageants*. Manchester: MUP, 1958.
- Fitzherbert, Master. *The Book of Husbandry*. 1534. Ed. Walter W. Skeat. London: The English Dialect Society, 1882.
- Fleming, Robin. *Britain after Rome*. 2010. London: Penguin Books, 2011.
- Froissart, John. *The Chronicle of Froissart*. Trans. John Bouchier, Lord Berners. 1901. New York: AMS, 1967.
- Fussell, G. E. *The Old English Farming Books*. London: Crosby Lockwood and Son, 1950.
- Fussell, G. E. *The Classical Tradition in West European Farming*. Cranbury, New Jersey: Fairleigh Dickinson University Press, 1972.
- Gies, Frances and Joseph. *Life in a Medieval Village*. New York: Harper & Row, 1990.
- Hartley, Dorothy. *Lost Country Life*. New York: Pantheon Books, 1979.
- Heresbach, Conrad. *Four Bookes of Husbandrie*. Trans. Barnabe Googe. 1577. London: Thomas

Wight, 1596.

- Hines, John. "Society, Community and Identity." *After Rome*. Ed. Thomas Charles-Edwards. Short Oxford History of the British Isles. Oxford: OUP, 2003.
- Hingley, Richard and David Miles. "The Human Impact on the Landscape: Agriculture, Settlement, Industry, Infrastructure." *The Roman Era*. Ed. Peter Salway. Short Oxford History of the British Isles. Oxford: OUP, 2002.
- Hoskins, W. G. *The Making of the English Landscape*. 1955. Lower Dairy: Little Toller Books, 2013.
- Langland, William. *Piers Plowman*. Ed. Elizabeth Robertson and Stephen K. A. Shepherd. New York: W. W. Norton & Company, 2006.
- McRae, Andrew. "Husbandry Manuals and the Language of Agrarian Improvement." *Culture and Cultivation in Early Modern England*. Ed. Michael Leslie and Timothy Rylor. Leicester: Leicester University Press. 1992.
- McRae, Andrew. *God Speed the Plough*. Cambridge: CUP, 1996.
- More, Thomas. *Utopia. Complete Works of St. Thomas More, Vol. 4*. Ed. Edward Surtz, S. J. and J. H. Hexter. New Haven: Yale University Press, 1965.
- Prestwich, Michael. *Plantagenet England*. Oxford: OUP, 2005.
- Pryce, Huw. "The Christianization of Society." *From the Vikings to the Normans*. Ed. Wendy Davis. Short Oxford History of the British Isles. Oxford: OUP, 2003.
- Schmidt, Alexander. *Shakespeare Lexicon and Quotation Dictionary*. New York: Dover Publications, 1971.
- Scott, Charlotte. *Shakespeare's Nature*. Oxford: OUP, 2014.
- Sharpe, J. A. "Economy and Society." *The Sixteenth Century*. Ed. Patrick Collinson. Short Oxford History of the British Isles. Oxford: OUP, 2002.
- Tacitus. *Agricola, Germania, Dialogus*. Trans. M. Hutton, W. Peterson, 1914. Rev. R. M. Ogilvie et. al. Loeb Classic Library. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1970.
- Thirsk, Joan. "Making a Fresh Start: Sixteenth-Century Agriculture and the Classical Inspiration." *Culture and Cultivation in Early Modern England*. Ed. Michael Leslie and Timothy Rylor. Leicester: Leicester University Press. 1992.
- Tusser, Thomas. *Five Hundred Points of Good Husbandrie*. 1573, 1577. Ed. Sidney John Herson Herrtage and William Payne. London: The English Dialect Society, 1878.
- Walter of Henley. *Husbandry, together with an Anonymous Husbandry, Seneschaucie, and Robert Grosseteste's Rules*. Ed. Elizabeth Lamond and W. Cunningham. London: Longmans, 1890.
- 三好正喜 「16世紀後半のニーダーライン地方における作付組織について——ヘレスバッハ『農業にかんする4章』を中心として——」『農林業問題研究』第4号・1965年12月
- 若原英明 「初期エンクローチャー覚書」『トマス・モアとその時代』田澤昭夫 他編 研究社出版 1978

#### 参考文献

- Bailey, Mark. *The Decline of Serfdom in Late Medieval England*. Woodbridge: The Boydell Press, 2014.
- Chartres, John and David Hey. Ed. *English Rural Society 1500-1800*. Cambridge: CUP, 1990.

- Googe, Barnabe. *Eclogus, Epitaphs and Sonnets*. Ed. Judith M. Kennedy. Toronto: University of Toronto Press, 1989.
- Hilton, R. H. *The Decline of Serfdom in Medieval England*. London: Macmillan, 1969.
- Tawney, Richard Henry. *The Agrarian Problem in the Sixteenth Century*. London: Longmans, 1912.
- Thirsk, Joan. Ed. *The English Rural Landscape*. Oxford: OUP, 2000.
- Whittle, Jane. Ed. *Landlords and Tenants in Britain, 1440-1660*. Woodbridge: The Boydell Press, 2013.
- 石井美樹子 訳 『イギリス中世劇集——コーパス・クリスティ祝祭劇』 東京 篠崎書林 1983
- 國方敬司 『中世イングランドにおける領主支配と農民』 東京 刀水書房 1993
- 南川高志 『海のかなたのローマ帝国』 東京 岩波書店 2003
- カエサル 『ガリア戦記』 國原吉之助訳 東京 講談社学術文庫 1994
- ギース、ジョゼフ／フランシス・ギース 『中世ヨーロッパの農村の生活』 青島淑子訳 東京 講談社学術文庫 2008
- タキトゥス 『ゲルマニア アグリコラ』 國原吉之助訳 東京 ちくま学芸文庫 1996
- ヒルトン、R.H. 『中世イギリス農奴制の衰退』 松村平一訳 東京 早稲田大学出版部 1998
- ベーダ 『ベーダ英国民教会史』 高橋博訳 東京 講談社学術文庫 2008
- モア、トマス 『ユートピア』 平井正穂訳 東京 岩波文庫 1957
- ラングフォード、ポール 原著監修 『オクスフォード ブリテン島の歴史』 1～6 鶴見博和 日本語版監修 東京 慶應義塾大学出版会 2009-2015
- ラングラント、ウィリアム 『農夫ピアズの幻想』 池上忠弘訳 東京 中公文庫 1993